2012年（平成24年）
第56号
（8月15日）

# 平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

## 「世界平和」に向けて、祈りを捧げる　～比叡山宗教サミット、平和祈願、戦争犠牲者慰霊～

8月は「平和」を考える月にふさわしく、3日から4日にかけて京都国際会館と延暦寺で「比叡山宗教サミット・世界宗教者平和の祈りの集い」が、京都教会では5日に「平和祈願の日」、15日に「戦争犠牲者慰霊・平和祈願の日」が行われた。

### ◆宗教サミット25周年記念事業

1987年に延暦寺で「比叡山宗教サミット」開催されてから25年。その記念事業として「世界宗教者平和の祈りの集い」が3～4日、宝ヶ池の国立京都国際会館で東日本大震災を受けて『自然災害の猛威と宗教者の役割』をテーマに開催された。

3日、開会式の式典で、災害や紛争犠牲者に黙とうを捧げ、仏教、キリスト教、イスラームの代表者があいさつした。次に哲学者の梅原猛先生から講演があり「物質文明・科学技術文明は行き詰まっている。解決には日本仏教の思想が大切だ」を語った。

引き続き、シンポジウムが行われ、震災復興支援の取り組みを紹介し、大災害に直面した時に求められる宗教者の役割について議論を深めた。最後に、内戦状態のシリアから参加したシリア正教の大主教が急きょ登壇し、支援と祈りを求めた。

4日は「原発問題と宗教者」をテーマに日・英・米・独など6ヶ国の宗教者によるフォーラムが行われた。そして、「原発を稼働し続けることは宗教的、倫理的に許されることではない」と訴える『比叡山メッセージ2012』をまとめ、幕を閉じた。

その後、会場を比叡山延暦寺に移し、13カ国から宗教者約千人が集まり、平和を願う鐘をついて黙とうし、仏教、キリスト教、神道、イスラームなど、各宗教の作法で戦争や災害の犠牲者のための祈りを捧げた。

京都教会の会員は3日の開会式の聴講と、両日のボランティアに参加した。

### ◆平和に向けて「できることから行動しよう」

5日、京都教会において「平和祈願の日」式典が行なわれた。世界平和を願って、会員代表による献鶴の儀が行われ、参拝者は真心から法華経を読誦した。

引き続き、テラ・ルネッサンス理事の鬼丸昌也氏から講演が行われた。テラ・ルネッサンスが取り組む「地雷除去」や「子ども兵」などについて活動報告を行い、「私たちにできることは、1.事実を知る、2.できることを実践（行動）する、3.周りに伝えることだ」と述べた。

### お知らせ（９月の教会行事）

| | | | |
|---|---|---|---|
| ９月 | １日（土） | 朔日参り・布薩の日 | 9：00～ |
| | １日（土） | 敬老会 | 12：00～ |
| | ４日（火） | 開祖さまご命日（各支部） | |
| | ８日（土） | かめおかこころ塾<br>「ガレリアかめおか」にて<br>※根本・本会外務部長が講演 | 13：30～ |
| | １０日（月） | 脇祖さま報恩会 | 9：00～ |
| | １５日（土） | 釈迦牟尼仏ご命日 | 9：00～ |
| | ２３日（日） | 秋季彼岸会 | 9：00～ |

### 時事刻々

猛暑が続く中、寝不足の抜けない人が多いことだろう。ロンドン五輪の各競技に日本中が湧き立った。日本選手の活躍には目覚ましいものがあった▼獲得したメダル数は史上最多という。初めてや何十年ぶりのメダルという競技も多かった。連覇という偉業を達成した選手もいた▼勝者のインタビューには、必ず周囲の人たちへの感謝の言葉があった。ライバルに勝とうと、四年間鍛錬した選手もいた▼視線を日本に転じてみると、競争に勝つため相手の足を引っ張る人。相手を変えようとするする人。職場にも、学校にも、政界にも、そんな人が目につく▼本会では「すべては自分」と教えてもらっている。全ての縁は自分を励ましてくれるものであったり、育ててくれるものである▼惜しくも勝利を得られなかったとしても、多くの人に感動を与えてくれた。その上、五輪で活躍した選手たちから、大いに学ぶところがあった。

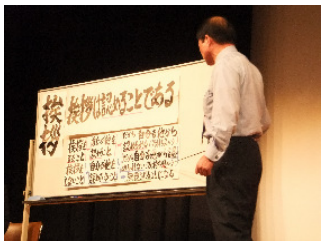
## 「元気が出る教育者講演会」再び！

7月15日、龍谷大学アバンティ響都ホールにおいて京都教育者教育研究所、京都明社が共催して、「元気が出る教育者講演会」が実施された。教育者や教育に関心を持つ300人ほどが参加した。

講師は大畑誠也氏（九州ルーテル学院大学客員教授）。昨年10月に行われた「教育者講演会」において、大変好評だったため、再び講演を依頼した（主催者）。

また、特別ゲストとして安藤麻里（ＷＢＡ女子ライトミニマム級世界チャンピオン）が登場。短期間で世界チャンピオンになれたのは高校時代の陸上競技（砲丸投げ）が原点であると発表した。

大畑氏は前回の講演で悪戦苦闘能力として5つのポイントを述べたのに対し今回は「挨拶」に絞ってその重要性を述べた。挨拶を大きな声で行うため、「バランスの良い朝食」「早起き」の大切さを、体験と事例を交えて説明した。参加者は90分の講演に引き込まれ、自分たちの生活のあり方を見直す機会を得た。



## 年はとっても元気いっぱい　～法輪クラブ～

6月28日～29日、法輪クラブの研修旅行が実施され、小豆島を訪れた。小豆島に着いた一行は、日本三大渓谷美の一つに数えられる「寒霞渓」で、絶景を堪能した。その後、ホテルで大宴会、カラオケを歌いながら、楽しい一時を過ごした。

翌朝は「二十四の瞳映画村」を見学。その後「なかぶ庵」でそうめん作りを体験した。続いて、日本のオリーブ発祥の地の「オリーブ園」を見学した。

一泊二日の旅行で、自然の息吹を感じ、懐かしい思いに浸り、しっかりいのちの洗濯ができ、年はとっても元気な法輪クラブ。

## ゆめポッケ・キャンペーン完了　228袋を集める

8月5日、「平和祈願の日」式典において「ゆめポッケ」発送式が行なわれた。ゆめポッケ・キッズキャンペーンは、平和祈願式典で学んだように平和に向けた行動の一つだと言える。

6月1日にスタートしたこの運動は6月5日に勉強会を行い、その後各支部の婦人部・少年部が中心となり取り組んできた。

発送式では、京洛支部の吉田親子がポッケづくりを通して平和の大切さを学んだと発表を述べた。今年はゆめがいっぱい詰まったポッケが228袋集まり、その日のうちに本部に向けて発送された。

## ちびっ子たちが集まる～少年少女フェスティバル

7月29日、大阪普門館において、近畿支教区少年少女フェスティバルが開催された。例年は外部施設を利用するのだが、今回は大阪普門館で実施された。京都からはスタッフも含め78人が参加した。

京都教会では、鼓笛部とバトン部による舞台発表と、子どもたち向けのボールゲームを担当した。参加者は近畿の少年部と共に交流を深め、各プログラムに参加して、楽しい一日を過ごした。

## ●おためし

**（校成会のことば）**

釈尊が成道する前にブッダガヤーで禅定に入られていた時、さまざまな妨害を受けました。いわば、魔が現れたのです。私たち凡夫だったら、その妨害に負けてしまったでしょうが、釈尊はついにそれに打ち勝ちました。誘惑や脅迫をはねつけたからこそ、悟りが確固不動たるものになったのです。結果的には、その魔が釈尊の悟りを助ける働きをしたといえましょう。

このようなことは、私たちの身の回りでも起こるのです。たとえば、教会のお役を受け「これから精進しよう」とお誓いしたのに、そういう時に限って、決意した心を惑わすような状況が出てくることがあります。こうした時、「それは、仏さまのおためしだよ」と先輩幹部は諭してくれます。いわば「おためし」はその人の決意が本物であるかどうかを、実践する前に仏さまがさまざまな現象をとおして試しているのです。そして、それを負けずに修行することによって、信仰も本物になっていきます。

## 今月の言葉　～学ぶ姿勢で豊かな人間関係を～　京都教会長・佐藤益弘

猛暑が続きますが、多くの皆さんが協力して節電や節水などに努めておられます。一人ひとりが自分のことだけを考えるのではなく、他の人々の暮らしのために支えあう行為こそ、尊いものであります。本来あるべき人間社会の姿そのものを見せていただきながら、お蔭様で有り難い生活が続けられることに感謝しております。

佼成誌８月号において、**「足し算・掛け算の人間関係」**という会長法話をいただきました。

前半の**「異なるものを尊重する」**というご法話では、いろいろな人間関係のあり様が書かれています。双方にプラスになる足し算の関係、相乗効果を生む掛け算の関係、引き算のような負の関係などです。その中でも、ふつうは、足し算や掛け算といった自分に都合のいい関係を望むというお話から、ふつうの人間としてのものの見方を教えていただいたものと思います。

一方、いつも顔なじみばかりの集まりは発展性にかけるということや、男性と女性が結婚して夫婦となることで新たな生命が誕生するお話をとおして、**「自分とは異なる者と縁を結ぶことが、より発展性や創造性に富むことなり、そこに人生の妙味があるといえます」**と教えてくださっております。まさに「諸法の実相」、仏さまのものの見方を教えてくださっていると受けととめました。そのためには、先ず自らが学ぶ姿勢をもち、大らかな心で人とふれあうことができれば、豊かな人間関係が築けるということを教えていただきました。

そのご法話を通して、自分と正反対の考えを持つ人や異なるものとの縁にふれるとき、心田を耕すことで、いま授かっているご縁を救いや喜び、功徳に変えることが叶うものだと私は思いを深めました。

会長先生は、後半の**「大らかな心で」**というご法話で、自分とは異なる人を受け入れ、お互いに持ち味を発揮しあうために大切なこととして三つの点について教えてくださっています。

一つめは、**自己を確立する**こと。その基本は「自分を尊べる人になる」ということ。

二つめは、**誠実に、正直に、**ことに当たる姿勢を貫くこと。

三つめは、**相手との違いを認める**こと。

私はこれら三つを「大らかな心」、言い換えるならば「仏心」、大いなる慈悲心によって護念されている仏の子としての立場からとらえると、一つめは、仏性の目ざめ、或いは仏性の自覚が大事であると説かれていると解釈することができると思います。二つめについては、仏性を輝かす修行に臨む姿勢が説かれ、三つめは、仏性礼拝の精神を堅持することの大切さを説いてくださったものと受けとめました。その三つをしっかりと自分のものにする努力が重要になります。また、それらが基となって大調和の世界が具現できるという、確かな思いに至りました。

今月の、会長法話のタイトルである「足し算・掛け算の人間関係」を私は次のように受けとめました。

８月15日、終戦記念日を迎えます。毎年その日、本会でも「戦争犠牲者慰霊・平和祈願の日」として式典を執り行わせて頂いております。先達の身命を賭しての並々ならぬご苦労が「足し算」されて今日があるのではないかと思います。さらには仏さま、ご先祖さまをはじめ大勢の人々の祈りが「掛け算」されて、今日の国家、世界が築かれているのだと思うのです。そのお蔭により様々な人間関係を結ぶことが出来るということも忘れてはならないと心に刻ませて頂きました。

すべてから学ぶ姿勢をもつことを肝に銘じて、今月も精進させていただきます。

## カウントダウン第６０号（その１）

**１２月１５日発行の第６０号で丸５年を迎えます。この５年間の記事の中からピックアップして再び記事を載せます。**

～創刊号　2008年1月15日発行より～

### 京都佼成議員懇話会発足

昨年（2007年）12月9日、京都教会において、19名の府議会、市議会議員出席のもと、京都佼成議員懇話会（京都議員懇）の設立総会が開催されました。

この会は、立正佼成会会員綱領と法華経観に基づく政治浄化の理念を学び、政治活動を通じて広く社会に貢献することを目的として設立されました。

～中略～

佼成会会員は、「自己の利害得失」に基づく投票ではなく、「人々の幸福」を願って一票を投じることに努めています。また、選挙に対して無関心であってはならないと、市民に棄権防止を呼びかける取り組みをしています。こうした考えに共鳴して同会に参加した議員からは、「この会は超党派の会として、地域のため、人々の幸せのために協力しあえる場になる」と期待する意見も発表されました。

総会後、議員と教会役員との懇親会が持たれ、活発な意見交流がなされました。この交流を通して、政治と宗教という活動の舞台は異なるが、共に協力していくことを確認しあいました。

# 庭野開祖の宗教観・平和観　「一乗の道」

**《日々これ法燈の継承》**

法燈継承祝賀会には、海外・国内の宗教者、さらに政財界をはじめ、各界から 850 人もの方々が参列して下さった。さらに翌日は、「立正佼成会に提言する」というテーマで「法燈継承記念シンポジウム」が開かれ、飯坂良明・学習院大学教授からも、これから立正佼成会が目指すべき方向についてアドバイスを下さった。

「組織の運営が成功するか否かは、トップと中間管理職、サブリーダーにかかっていると言われる。新約聖書の『ヨハネの黙示録』に次のような警告の言葉がある。『あなたは初めの頃の愛から離れてしまった』と。初めの頃の愛、それは最も純粋で、熱心な愛のことである。神仏や他者との出会いで生まれる愛であり慈悲である。その愛や慈悲が信仰生活を続けていく中で、いつしか冷め、マンネリ化してしまいがちだ。どうか初めの愛を忘れることなく心を奮い起して邁進していただきたい」。

さらに報道関係を代表して、北畠清泰氏は、こんな指摘をして下さった。**「電波メディアが主要な布教手段になると、それぞれの対象者にふさわしい方法で法を説く対機説法が不可能になる。相手によって白と黒を説き、あるいは質問に対しても無言で応じるというような仏教的説法の醍醐味が失われがちだ。教団の指導者が交代する時、活動範囲をせばめたり他組織との交流に消極的になる例が多い。対外的活動・交流よりも、個人・教団の内面的充実が重要だという理由もあるだろうが、『外』か『内』かという二者択一の考えは正しくない。他教団との対話、協調に努めることは自教団のアイデンティティーを自覚することになる」**

いずれも、立正佼成会の活動をつぶさにご覧になってこられた方々で、会の現状を鋭く分析されたアドバイスは的を得ていて、愛情に満ちたものであった。これからの佼成会に大きな期待をかけて下さっている思いがひしひしと伝わってくる、有り難いお言葉の数々であった。なお、法燈継承は平成 3 年 11 月 15 日をもって終了したのではない。それ以後の毎日毎日が法燈継承であることを忘れてはならない。

**《後事に憂いなし》**

佼成会の会員にとってのいちばんの修行は、法華経の教えによって人さまをお救いすることであり、その修行によって、自分も法華経の教えをしっかりと身に体し、仏への道をともに歩むことにある。 その修行がお導きであり、手取りであり、あるいはまた、色々な奉仕である。**法華経は、この六道輪廻の世界を厭って逃げ出すのではなく、この輪廻の世界こそが菩薩道実践の場であると教えている。人のためになる利他行すなわち菩薩行ができるのは、私たちの心の奥に仏性があるからに他ならない。仏性があるから菩薩行ができ、菩薩行を実践するから仏性はさらに磨かれ、仏性が磨かれるからいっそう菩薩行に励めるというように、仏性と菩薩行は不離の関係にある。**

世に多くの大乗仏教経典が伝えられているが、そこに共通するものはただ一つ、菩薩行のすすめであると言っても過言ではあるまい。**とにかく、一度自分を捨てて、人さまの為にありったけの力をふりしぼってみると、そこに妙の世界がひらけてくる。今まで味わったことのない新しい喜びが得られる。その喜びを味わってこそ本物の帰依が生まれてくるのである。その帰依心を持たなくては、せっかく信仰をしても、本当の幸せは得られない。**そうして一人ひとりが生まれ変わっていくことによって、社会や国全体、さらには世界が生まれ変わっていくのだと信じて、庭野開祖はこれまでやってきた。

とはいえ、法華経の真理、宇宙の大法則を説いて仏道に導こうとしても、だれもがすぐに理解できるというものではない。人がいちばん関心を持っているのは自分自身のことであり、いま現実にぶつかっている問題をどうしたら解決できるか、ということだ。その方法を具体的に教えてあげて、**真理の教えとはどういうものか、具体的につかんでもらうのが方便である。だから、方便即真実であり、真実も方便を通して本当に人々に理解してもらえるのである。**

**「この人をどうしても救いたい」という慈悲心が生まれると、その人が直面している苦をどうしたら解決してあげられるかと、ありったけの力をふりしぼらずにいられなくなる。そこに方便力が生まれる。ここまでが方便で、ここからは真実だというような境はないと言ってもいいのである。**「大日経」には「菩提心を因と為し、大悲を根本となし、方便を究竟と為す」という言葉が見える。全てが方便だというのである。(つづく)

## 渉外部からのメッセージ

この平安月報を発行し始めてから間もなく丸５年を迎えます。今までの記事の中から「こんな事もあった」というものをピックアップして掲載していこうと思います。多くの方々の支えや励ましのお声を頂きながら毎月発行出来ました。ありがとうございました。また開祖さまのお言葉は何十年経った今でも心に響くものがあります。この月報も開祖さまに倣っていけるよう精進したいと思います。今後もよろしくお願いします。

**この月報はホームページでもご覧頂けます。**

**アドレスは http://rkk-kinki.blog.ocn.ne.jp/kyoto/**